
森林ボランティアの心得

わくわくビレッジ森の会

清水 長

2018年11月30日

はじめに

以下の文章は全くの私見であり、会の見解ではありません。
今回もパクリ・フリーです

目次

1. 善意の事故
 2. プロとアマ
 3. Leadership と Fellowship
 4. 日常と非日常
 5. ヒューマンエラーを防ぐ
-

01 善意の事故

40 数年前、石垣島の港で眼前に起きた即死事故。

波止場にホーバークラフトが接岸した。プロペラの轟音が響く中、回っているプロペラは肉眼では見えない。と、波止場に立つ中年がクラフトに飛び乗ってもやいを取ろうとした。「ボコッ」と鈍い音がして、男性が仰向けに倒れた。ややあって鼻孔と耳孔から出血した。あっ頭蓋骨骨折で死んだと思った。

翌日の新聞によると、男性は即死、クラフトの会社の社員との事である。クラフトはプロペラが進むが港湾法では船の扱いである。

男性は、会社の船が入港したので善意から「手伝い」をしようとしたのであろう。

船の扱いには慣れていたのかも知れない。会社の船だから何か手伝うのは当たり前、音はうるさかったがプロペラが見えるわけではない、等々の情況。ホーバークラフトはこの数ヶ月前から就航したのだから、男子は多分慣れてはいなかっただろうし、クラフトの船員ですらなかったであろう（普通なら必要な要員を用意したはずである）。

見方によっては余計なことをして事故を起こしたのである。男性がクラフトに飛び乗る必要性も必然性も全くなかったであろう。

<教訓>教育と訓練なしに、善意であっても「手伝い」をしないし、させない。

02 プロとアマ

プロとは仕事で飯を食っている人、アマは道楽で仕事をしている人のこと。当然、プロの方がアマより仕事の技量は数段上であり、同じことができるわけがない。我々ボランティアの仕事は、1に安全、2に快楽、3、4がなくて5が能率。一方プロは1に儲け、2に能率、3に安全ってことかな。目的が違うからやり方も違う。

枝打ちを例にあげよう（本会や「お日の森くらぶ」では対象木が”ない/小さい”ので枝打ちをしないが、現在の日本では膨大な需要がある）。プロは鉋で枝打ちをする。切り口がキレイだし、効率が良い。わたしも田中林業で一度体験した。感想。プロならではの仕事であり、アマがとても出来る作業ではない。我々がやったら毎日救急車の出動である。調査した訳ではないがアマは全員鋸を使うと確信している。安全を考えたら当然の処置である。

林業のプロの中には、木から次の木へと、幹から幹へと移動する名人がいる。我々アマは伝説として継承すれば良い。アマはアマとして程を知らなければならない。尚、枝打用の鋸は細かい歯のものが良い。針葉樹の枝は幹よりも硬い（手道具のいろは「大鉋を振るう」を参照）。伐倒用の大鋸は柔らかい幹を伐るのに効率が良い。硬い枝は細かい歯の方が切り口が平滑となり直りが早いし切るの楽である。

と同時にアマならではの小道具もある。伐倒時の受口・追口の仕口に水準器の使用を勧める。水準器を使うプロはいない。プロはチェーンソーを使うし、チェーンソー自体に一種の水準器の機能がある。アマが伐倒を上手にできない原因が、受口と追口との「段違い平行面」が平行に出来ない事である。斜面の傾斜による錯覚により、手鋸の切口の水平が出来ないのである。水平面をとるには水準器を使えば良い。

巷間言われる「XXX本伐れば伐倒が上達する」という伝説は、プロを目指す人に通じる話。我々アマが1本からでも上手に伐倒するには、それなりの小道具を使うべきである。水準器を使えば安全性が格段に向上する。もう一つがチョークの使用。見当がつけやすい。コツは両眼で正対して見当をつける事。

<枝打ちは細めの歯の鋸で行う>

<伐倒には水準器とチョークを利用>

チョークホルダー 400円程 水準器 500円程

03 Leadership (Lと略) と Fellowship (Fと略)

はじめに

Lは統率（力）や指導（力）。Fは連帯（感）や協調・従順（性）とされている。ボランティア活動の統括者の中には「活動班のリーダーは連絡通達を伝えるのが目的で、指導力を求めるものではないので気軽に考えて下さい」という人もいる。室内での、日常的な、単純な作業ならそれでもかまわない。しかし、山仕事では状況は全く異なる。高校山岳部の時、リーダーはメンバーの命を預かると教育された。リーダーは全ての責任を持つ。それ故、リーダーの決断には無条件に従え。それは同時に決断後に結果論を詮索しないという事でもある。そうでなければ団結が悪化する。山仕事のリーダーは殆ど強力な統率者でなくてはならない。

1) 山仕事のボランティア活動の特性

外仕事。風・雨・日光・雷・雪に晒される。集団作業が殆どだから他人と共同作業である。ほとんどの人にとって日常の行為とは全く違う、非日常的な作業。よってリーダーの資質・判断力人格・力量が大切である。

2) 体験したヒヤリ例

東日本大震災の11月、陸前高田に復興支援に行った。運転者（♂）、私（リーダー）、女性2人で風呂に行った。風呂に行った温泉場は九十九折の急坂を300m以上も登った上で、車道は対向1車線。風呂に入って暫くして運転者が人事不省に陥った。救急車を手配し、一週間の入院となった。事故が入浴中でよかった。もし帰路の車中で発生していたら、何人も死亡したであろう。助手席にいた私に出来ることはサイドブレーキレバーを引くこと、ハンドルを切って車を山側にぶつけるしかなかった。

3) 運転者の体調と経過

血圧の薬を常用していることは申告済。当日始業時に不調を口にしていて。昼食中には運転席にうつ伏せになり、食事は果物数切れのみ（私は観察していた）。温泉の往路中、車の左腹が枝を擦った時に、「ごめんね」と断りを口にしていて。清水（有免許）自身も運転の安全に不安を認識していた。

4) 当日の交通状況

車は運転者所有の日産キャラバン一台のみ。免許持ちは3人。現地での買い物、現場移動はマイカーのみ。支援参加者は各自高速バスでの五月雨参加、流れ解散。参加者の運転力量は不明。

5) 事故を防げなかったのか？

私が「事故を起こして申し訳ない」と謝罪したが、同行の女性は「不慮の事故だから仕様がな」と呟いた。私はそうではないと考える。同行者が救急搬送されたのだから、立派な事故である。何時撤収の判断をすべきだったのか。

a) 朝から運転者に休養してもらう

他の2人が運転する。馴れていない大型の車であること、荒廃した道路事情から二の足を踏んだ。

b) 昼食時に撤収

帰路の運転が不能なほどの不調とは判断できなかった。

c) 風呂を延期する

今となればこれが適切だったと思う。

d) 車の腹が枝を擦った時

運転者自身が擦ったことを認識していたのだから、安全を理由に撤収する決断をする。これが最後の判断時期だったのである。が出来なかった。

6) Lに背いていなかったか

大事故にならなかったのは全くの偶然。自からの不決断が重大な結果をもたらしたと思うと今だに後悔が残る。疑念や不安が生じたなら安全側に判断するのが鉄則である。

7) Fとは従順ではない

撤収する勇気。これこそ多くの山の遭難から導かれる真の勇気である。メンバーにも必要なFであると思う。

おわりに

運転していた方は1年後心臓の病で急逝された。同行の女性の一人は結婚が決まり、まとまった休みが取れたので復興ボランティアに参加した。もし大事になっていたら、私（死亡していたかも知れない）や私の家族は、どう責任を取れるのだろうか。

あれから6年、いまだに何度もかつての光影がフラッシュアップし、恥じ入る思いである。山仕事ではLeaderもFollowerも同じ環境下である。体調を訴えるのは、Fの一端という見方も可能だと思う。正解はないのかも知れない。

皆さんの考えをお知らせ下さい。

04 日常と非日常

日々の生活は日常、山仕事は非日常、事故は非常時。では日常の仕事にをよく知り抜ければ山仕事の非常時に（＝事故）を防げるのか？

1) 山仕事での事故の様相

事故に詳しい弁護士さんの話では、多くの事故が極めて単純な転んだとか、切ったなどの怪我。そして、そのほとんどがいわゆる「ながら作業」に由来しているとの事 (One Sheet Lesson 8 のちょっと気になる仕事・身の熟し・立ち位置の両越しをしない、を参照)。

山仕事特有の技術・技能の力量が少ないからという事故ではなく、様々な単純な作業での欠点から事故が発生したと考えられる。

2) 対策は明瞭

ならば、やり方は単純明確。単純な作業に際して①時間のゆとりをとり、②手順を守り、③手数を惜しまない、である。非日常的な行為に習熟していないから事故が起きたのではなく、日常的な行為の中に落とし穴がある。

これが解れば以下の文は蛇足である。

3) 日常的にどんな注意が必要か。

各種の法則、ことわざがある。どれも一定の正しさを示している。
ハインリッヒの法則。マーフィの法則。段取り 7 分。ハウレンソウ（報告・連絡・相談）。
追悪魔（おごるな・威張るな・焦るな・腐るな・負けるな）。ダラリ追放＝三無主義（ムダ・ムラ・ムリ）。刺身の法則（どの組織も 3 割の不可欠の、4 割の埋草の、3 割のお荷物の人で構成されている）。後知恵としては有効である。

4) 安全の形而上学

職人の常識。整理・整頓されている現場ほど早く、美しく、安全である。気遣い、心配りがあるから。そうなるには言葉遣い、身の熟し、身ぎれいに配慮する事。
心の緊張を保たなければならない。モラル (morals 規律) とモラール (morle 士気) を高める。軍隊で無精ヒゲを厳しくしたり、靴をピカピカに磨くようにうるさいのは精神のゆるみを防ぐための配慮である。

仲間内で信頼感や連帯感を増すには、暗黙の了解を止め、必ず声を出し合う事である。英語で言う、speak out であろう。作業中に違和感を覚えたり、気になることがあったなら、必ず仲間（必ずしもリーダーではなく）と相談して意志決定する。

適度な冗談やボケは一種の安全弁である。平らに言えば「みんなが気持ちよく作業できる」が安全の肝である。

Seaman Ship の言う「スマートで、目先が効いて、几帳面」は Woodman にも真である。では日常的にどんな注意をすれば良いのか。私の提案は、“美しく食べる”と言いたい、遠まわりかもしれないが。もっとも本能的な行為であるから、毎日 3 回は行なっているから、生活の乱れがもっとも早く「食」に発現するから、である。

05 ヒューマンエラーを防ぐ

ヒューマンエラーとは人的要因に起因する失敗

1) バイアス (偏向 .Bias)

正常バイアス：自分に都合の良い情報のみ参照し、都合の悪い情報を無視する傾向

確証バイアス：先入観に適合する情報のみ参照する傾向

2) 心理的要因

慣れ：以前大丈夫だったから今日も大丈夫と判断する。

目立ち：他人の前で良い格好をしようとする。

高すぎる目標：今までとは違い、今日はより以上の事が出来ると考える。

権威に平伏す：熟練者や権威的な人（たいていは声の大きい人、威圧的・断定的な言辞を口にする人）に追従する。肩書や資格や性格と判断力とは別問題である。

競争：他人や他集団より上に行こうとする行動。

集団心理：集団で行動することにより、一人でやるよりも実力が高くなったと考える誤解。

3) 自分でできる技術向上法

各種の研修会への参加。ex. チェンソーの講習

検定制度の利用。ex. 森づくり安全技術・技能習得制度

他地方との他流試合。地域毎に独特のやり方・技術・道具がある

他団体との交流。いろいろな作風・やり方がある

周辺技術の講習。ex. 救急法だけでなく小児の怪我の特徴や障がい者の発見や対処法などの講習を受ける

我流を排する。必ず経験者から man to man で伝授させること。書物や映像を手引きに「独り勝手」の独習をしてはいけない。技能の伝承の際には目線の動きや手捌や力の加減など、本や画で伝えられないものが多い。山や木は1つ1つ違う。仲々一般化できないものがある。

4) チェンソー

基本的に個人の作業であり、個人の技量に左右される。精神疲労である。

多くの人が筋肉疲労と考えている。実は単調で間断のない振動と騒音により刺激がマヒして、頭脳がハイになり、それ以外の感覚が鈍化した、精神疲労である。つまり集中力が散漫になっ

たからではなく、あまりにも一点に精神が集中したために廻りの状況への気配りが無くなった故の事故である。

エンジンが不調だったり、チェンの目立てが悪く切れが悪いと一層イライラが増し無理な作業をし、精神疲労が増す。

単調な刺激に対する効果的な覚醒興奮作用として労働唄がある。キコリの唄は労働唄である。チェンソー用の新たな労働唄の創造が望まれる。

5) 要注意の人

眼つき、顔色、体臭、手つき、腰つき、足まわり、身づくろい、重心の位置、移動の滑らかさなどを、五感を使って参加者を観察する。

〈排除した例〉

現場に到着されたが、直立・直進できず、作業ができない体調を判断し、お帰り願った事があった。

〈勝手な行為をする人〉

①病気の人と、②性格による人を区別する。病気の人とは「森林セラピー」の対象者となる人の事 (ex. 多動の人やアスペルガーの人)。原則受け入れる (鳩の巣やお日の森でも例があった)。

必ず会で情報を共有する。性格に由来する人については、指示に従うよう説得する。当面は man to man で対応するしかない。次回以降は排除を辞さず (これは恐るべき言明である。ボランティア団体は任意団体であるが故に安全のために排除条項が可能と考えている)。

多動の人やアスペルガーの人については多くのツールがあるので各自参照されたい。我々は医療関係者では無いので節度を守る。判断についてはそれなりの根拠が必要なので標徴 (病気の決め手となる病状・例えばアスペルガーなら「数字への異常なこだわり」) について、それなりの学習が必要である。

6) 世代論

1960 年以降の日本人の体は激変した (One Sheet Lesson 8. 参照)。免疫が効かなくなった (すぐに化膿するようになった)。アレルギーの増加。体格の変化 (筋力や関節の可動域の低下・心の変化・言葉の変化 (名詞が伝わらない)。これらを加味して指示、インストラクションをしなくてはいけない。

7) 学習

個人では事故の再現はできない。だがシミュレーションで学習は可能だ。3.11 であった「釜石の奇蹟」を考え起こそう。学校教育により「地震→津波→てんでんこの避難」の教訓は、学習で天災から事故を避けることができる事を示している。多くの文献がある。独習してほしい。

8) だれにでも癖がある。

指示を出すとき、結論だけ言う人がいる。充分訓練された人だけで形成された集団なら、それもありだ。そうで無い集団なら、それなりの解説が必要だと思う。結論だけでなく、何故こうするのか、こうしないとどうなるのか、どんな不都合があるのか、これに関連した事故例、どのような利点があるのか、等々も解説すべきと考えている。その方が深く理解できるし覚えやすい、忘れにくいし、似た状況に応用できると思う。

また指示について、か細い心ではなくおおらかな心で、だが作業については大まかな気遣いではなく細やかな気遣いを目指したい。そして一人一人が自発的に伸びるインストラクションをしたい。

9) 一体感醸成のために

どんな精緻なマニュアルを用意したり頻繁に安全講習を行っても、最後の極め手は human factor だと某建設会社はいう。その会社では一体感を高めるためには Skin Ship (和製英語だが) が有効として、作業前に全員で互いに手をさすり合う運動をする。確かに団体スポーツでの手や体の接触は精神に有効な作用があると思う。

10) おわりに

我々はプロではない。日常生活の延長線上に森林ボランティア＝非日常がある。非日常からの知見・知識・作法・経験の日常化が安全策である。そして普通の人が、普通にしている事を、普通にする、を目指そう。

あしがき

本会の例会毎に配布したプリントをまとめました。
欠席された方、新たに参加された方への便利を考え、ネットでアクセスできるようにしました。部外の方にもアクセスできます。皆で知恵をよせあえればよいと思っています。

森林ボランティアの心得

著者 清水^{タケシ}長

〒 173-0037

東京都板橋区小茂根 4-14-12

TEL 03-3958-9353

soratoumi_drops@yahoo.co.jp

発行日

2018年11月30日 第一版発行
